

[朝日新聞
グローブ]第358号

これ、何と読む？

漢字の「笑」にイ・グ・ノー・ベルの
カタカナが隠れている。
グラフィックデザイナーの
岡田善敬の作品。北海道大学で
2018年に行われたイグ・ノーベル賞
関連イベントでお目見えた。
日本独自の「ロゴマーク」として
使われることもある。

The Asahi Shimbun GLOBE

毎年、思わず笑ってしまう奇想天外な研究に贈られる
「イグ・ノーベル賞」。今年はスイスで9月3日(日本時間4日未明)に発表される。
創設から35年、日本人の受賞も多い。どんな賞なのだろう。
取材してみると、笑った先に続きがあった。(文中敬称略)

特集は <https://t.asahi.com/globe>
GLOBE+ ウェブ、SNSでも発信中



共に創る。
共に生きる。

思わず笑った その先に

「しま牛」ペイントは コートに進化中

大野良祐 文 Ono Ryosuke GLOBE編集部

焦

げ茶色の但馬牛に白黒縦じまのコートをまわせると、シマウマのような見た目になった。数人が取り囲んで、丈の具合や着脱のしやすさのチェックを繰り返す。7月下旬、肉牛産地である兵庫県丹波市での取材で目にした光景は、インパクトがあった。

牛にシマウマ柄のペイントを施すと吸血昆虫サシバエの被害が半減するという論文が発表されたのは2019年。しま柄を吸血昆虫が避けるという、海外の先行研究を実証したものだ。しまの幅が5センチ未満だと、サシバエは接近したときに明暗の変化で目測を誤り、うまく体表に着地できなくなるという説があるが、メカニズムはまだ解明されていない。

研究に取り組んだ農業・食品産業技術総合研究機構の主任研究員、児嶋朋貴(42)=当時は愛知県農業総合試験場=らのグループは論文発表から6年後の昨年、イグ・ノーベル賞生物学賞を受賞。しましま黒毛和牛の写真とともに世界的な話題になった。

イグ・ノーベル賞の選考基準は「人々をまず笑わせ、その後に考えさせた」かどうか。研究や発見の新規性や革新性を評価する賞ではないのだ。笑いが呼び起こした関心が、科学を身近に感じさせる——そんな仕掛けだ。

丹波で進んでいるのは、しまま効果を商品化する試みだ。児嶋らの論文が出た後、各地でさまざまな実証や実用化の取り組みが進んだ。その中で、すぐにはげてしまふペイントに代えて通気性のよいコートを作り、今年5月に試験販売にこぎつけた。

アパレルメーカー「寿ニット」(大阪市)と岡山県農林水産総合センター、作業服小売り「オオツキ」(丹波市)の3者が取り組んだこの「モート!しま牛コート」は反響を呼び、成牛用の200着は、ほぼその日のうちに売り切れた。販売元のオオツキの電話は朝から鳴りっぱなしだったという。

それだけ、サシバエ被害が深刻だということだ。研究の出発点もそこにあった。コートの開発に協力する丹波市の「丹波農商」の代表取締役、大塩敦史(31)は「追い払いにくく牛は四六時中尾を振り、胴体を震わせ、脚を上げ下げする。かまれば痛みとストレスで食欲が落ち、体重も増えない。乳牛なら乳量が減る」と牛舎を見回した。サシバエの卵を孵化(ふか)させないための薬液や、牛舎のネット、木酢(もくそ)液やハッカ油の塗布など、畜産農家はさまざまな工夫をしてきたが、決め手はまだ見つかっていない。

寿ニットの代表取締役、松田克己(64)にイグ・ノーベル賞受賞について尋ねると、「それはうれしかった。ただ、おもしろいことをしているという感覚はなかった」と答えた。「農家さんにしてみれば、しままがサシバエに効くなら試したい、それだけだろう」

寿ニットと岡山県農林水産総合センターが4月から続けているコートの実証実験が今後のカギを握る。

研究を率いた児嶋は受賞後、科学イベントなどに引っ張りだこになった。1年がたったいま、「卵や肉、牛乳を日々目にしても、畜産物がどう生産されているかを知る機会は少ない。(受賞が)一般の方々が畜産を理解する機会になればと思うし、より分かりやすい言葉で伝えることを意識するようになった」と話す。



5月に試験販売された「しま牛コート」。屋外では、着用している方が体温は低かったという
photo: Ono Ryosuke



1997年 経済学賞
「たまごっちの発明」
横井昭裕(ウィズ)、
真板亜紀(バンダイ)=日本
※授賞理由は「仮想ペット
を飼育するために、
数百万人の人々に膨大な
時間を使わせた」
photo: BANDAI



論文に掲載された
しま柄ペイントの
黒毛和牛の写真
photo: Aichi Agricultural
Research Center



ロッテルダム副市長から勲章を受けるケース・ムーリカー(左)
photo: Arnaud Roelofs

「死んだカモの日」に 王室からナイトの称号

イグ・ノーベル賞は「科学の幅広さ」も重視しており、こんな研究にも賞を贈っている。

オランダ・ロッテルダムで6月5日、今年も「死んだカモの日(Dead Duck Day)」の催しが自然史博物館の前で開かれた。イグ・ノーベル賞かわいでは、つとに知られたイベントだ。

1995年のこの日の夕方、鳥類研究者で自然史博物館学芸員だったケース・ムーリカー(65)は階下の窓に何かがぶつかる大きな音を聞いた。全面ガラス張りのモダンな博物館の新棟には、よく鳥がぶつかり、死んでしまうこともあった。「きょうは何の鳥だ。窓は大丈夫か」と見に行くと、オスのマガモが死んでいた。次の瞬間、予期せぬことが起きた。

1羽だと思っていたマガモのそばに、もう1羽、生きたオスのマガモがいた。そのマガモが、死んだマガモと交尾を始めたのだ。「鳥類学者として極めて珍しい事象を目の当たりにしている、と直感して『記録者モード』に入った。見ているのは自分だけだった。正確な証拠を残さなければならなかった」と思った。正体はムーリカーは振り返る。時刻、場所、天候、日照条件……。学生時代から身につけていた手順で、あらゆる要素を記録。観察は75分間に及んだ。

動画が撮れるスマホなどない時代だ。手元の一眼レフカメラに、ほとんど未使用のフィルムがけたままたま入っていたことも幸いした。こうした生態の初めての記録となった。

論文を発表したのは2001年。6年かかったことについてムーリカーは、「特殊性や理論的な枠組みを固めるのに時間が必要だった。インターネットが普及する前で、文献にあたっても簡単ではなかった」と答えた。

論文が掲載されたのは自然史博物館の紀要で、多くの人の目に触れる刊行物ではない。「読んだのはせいぜい6〜7人ではないか」とムーリカーは言うが、イグ・ノーベル賞を主宰するアメリカ東海岸のマーク・エイブラハムズからは伝わっていた。03年5月、エイブラハムズから電子メールが届く。「極めて内密な話をしたい。電子メールか電話で

やりとりできますか」。この年のイグ・ノーベル賞生物学賞の打診だった。

この観察記録は、イグ・ノーベル賞の歴史のなかでも、繰り返し取り上げられてきた代表的なものの一つだ。珍しい現象は迷いなく科学的に記録する。そして、生物学に野生動物の生態が一書き加えられる——。

受賞後、「The Duck Guy(カモおじさん)」と呼ばれて世界的に親しまれるようになったムーリカーは、各地で講演を求められるようになった。一心不乱に観察・記録した様子を淡々と語ると、その愚直な感じが笑いを誘う。だが同時に、こうした研究者の行動が科学の裾野を広げていくのだということが伝わる。講演後には大きな拍手が起きる。

カモおじさんのもとには、世界各地から動物の珍しい生態に関する情報や報告が届くようになった。

ムーリカーは今年、館長もつとめた自然史博物館を退職。「死んだカモの日」に、オランダ王室は彼にナイトの称号を贈った。ロッテルダム副市長がムーリカーの胸に勲章をつけ、あいさつで「あなたの活動により、自然科学は人々にとって身近で、意味があり、魅力的なものとなった」とたたえた。

王室がナイト叙任の理由として、イグ・ノーベル賞の受賞に触れたことを「画期的だ」と、ムーリカーはいさづらっぽく笑う。しかし、真顔に戻って言った。「私は、あの現象は知られるべきだと考えた。だから論文を書いた」●(大野良祐)

イグ・ノーベル 賞とは

アメリカのユーモア科学雑誌の編集者マーク・エイブラハムズが1991年に創設した賞。「人々を思わず笑わせ、そして考えさせる」研究をした人や団体に、毎年10部門で賞が贈られてきた。数は一定しているが、部門は年によって変わる。現代社会への風刺・皮肉を込めて贈られるものもある。

イグは「〜ではない」という否定の接頭辞。なので、イグ・ノーベル賞は「裏ノーベル賞」とでもいった意味合いが。「恥ずべき」「不名誉な」という意味の単語「ignoble」ともかけている、と説明されることが多い。しかし、名前を決める際、多数意見だった「Ignoble Prize」では賞の趣旨と違うと考えた創設者が、「Ig Nobel Prize」とすることで落着いた「妥協の産物」であり、ノーベル賞のバロディーを狙った名前でもないという。

選考にはエイブラハムズのほか雑誌編集者、世界各国にいる過去のノーベル賞やイグ・ノーベル賞の受賞者、ジャーナリストが当たる。選考メンバーは非公開とされている。選考基準は「まねができない、まねすべきではない業績」であること。偶然通りかかった人に投票してもらうこともあるという。

授賞式に参加する際の渡航費や宿泊費は自己負担。賞品は、コピー用紙に印刷した賞状、手作りのオブジェなど。ハイパーインフレでほとんど無価値になった10兆ジンバブエドル札1枚も渡されていたが、入手が困難になったため、昨年はウェットティッシュが代役を務めた。●

ロダンの「考える人(The Thinker)」がひっくり返った「The Stinker(やっかいなやつ)」。ごく初期から使われているイグ・ノーベル賞のマスコットだ



